

## 巻頭言

来年の3月で停年になる。停年退職でうれしいことは、算数科教材研究法の講義をしなくてよくなることである。定年後は、数学科教育法のこと、教育実習の事前指導や事後指導のことも気にしなくてよい。

学生諸君は、若くて、体力もある。豊かに発展した日本に育って、児童・生徒の年齢に近く、子どもの呼吸に合った立派な実習授業をしている。参観して、近年は特にそう思うようになった。

忍耐力も薄く、根気力もなくなった老体の身が、自分のことは棚に上げ、今さら、あれこれ口を挟むことなどない。

だが、しかし、と考える。頭の回転が鈍くなっているからこそ、数学や理科や、進歩したメニューの給食に、消化不良を起こしたり、拒食症になる生徒の気持ちが分かるということがあるかもしれない。

孫には、ちち・ばばの考え方や食事量が適合するということもある。

また、加工品をベースにした献立が、彩り豊かに選り取り見取りの現代、高度成長期以後のむかしを知らない者には、素材の姿も、材料のよさも見えず、分からないということだってある。

数学の現代化カリキュラムには、よさが見えないという面があった。素朴な姿をさらすことない問題に、原始の味が感じられない。自分の習った数学と比べて、わが国の中等数学の中味に、大学の高等数学が付け加わってそう思ったと思う。

以上のようなことは、円周率をめぐる教材や、パイと関わる内容を、小学校・中学校・高等学校と取りだし、縦の連関を分析して傍証することが出来る。私は、本学会での発表会も利用して考えて来たことである。多様に広がり、いろいろな考え方を産み、大切に扱いたい円周率をめぐる学習事項が、算数の「公式」に押し込められている。「故に」と言って、この頃主張していることでは、円周率の算数科内容としては、黒表紙教科書の立脚点に帰った方がよい。誤解されることを恐れて言葉を付け加えれば、黒表紙の記述には在った、児童の心理への心配りがいまは薄く、そもそも、現代の教育課程のもとでは消えてしまうのだと思う。

三角形の合同条件なども、算数で教えないでよい。教えるとなると、若い、熱心な教師は、「合同」概念を教え、合同の「(複数の)条件」を教えようと頑張る。

まあ、こんなことも、10年間、講義を持ったお陰で、やっと言えるようになったわけである。もの言え、さらに考えさせられることになり、考えたことは、他人に話したくなるらしい。それが普通だという。残念ながら、私には、学生に話すように準備する年限は過ぎて、もう手遅れである。

(板垣 芳雄)